

## インドの停車場



今年の夏のボーナスは、緩やかながらも景気が上向いたこともあって、前年度を上回り最高額になったと報じられている。定年になってみるとボーナスの有難みがよく分かる。分かったところには貰えないのだから皮肉なもので、世の中全てそんなものではない。

かくいつ私も三年前までは、額面七桁手取り六桁ほどのボーナスを年二回貰っていた。下の二人の子がまだ在学中のため、一回分は学費の補助に消える。もう一回分位は定年も間近な自分のために使おうと、数年前から決めていた。それはまだ見ぬ世界を求めての海外旅行である。旅行会社のツアーに乗れば、

夫と二人でそここの旅は出来たのだった。

二人とも会社勤めだったから、纏めての休みはゴールデンウィークか夏休みしかない。どちらも会社の夏休みは、前もって申請さえしておけば個人の希望の日を四日ほど取れ、有給休暇を二三日たせば、二日の週休をはさんで十日ほどの休みになるのだ。た。

平成四年の夏休みは、インドと決めた。それまではヨーロッパや北アメリカが主で、アジアは香港以外は知らなかった。旅行雑誌の隅から隅までめくって、費用と行く先を調べた。そして一度は訪れたいと思ったガンジスのほとりのベナレス（バラナシ）の組み込まれた、二十万円もしない現地に六泊のコースを選んだのだった。

インド旅行は、もうそれだけで一遍の物語が書けるほど衝撃的な体験であった。私たち二人のために一人の日本語の達者なインド人がガイドとして付けてくれた。今回は一般のツアーでは体験出来ないだろう一夜を書くことにしよう。

注意していたにもかかわらず、私は四日目のアグ

ラ城見学の最中に気分が悪くなった。幽閉された王様が、最愛の妃の為に建立した壮麗なタジマハールを遙かに眺めては憂愁のうちに過こしたという楼閣から、タジマハールを横目に嘔吐し続けた。次のバザール見物はやめてホテルで休んだ。下痢も始まった。その日の午後は飛行機でベナレスに行く筈であったが、突然激しい驟雨が襲ったのだ。アグラの飛行場は水浸しのため使用出来なくなると、インド人のガイドが言つ。結局夜七時半の夜行列車に変更することになった。

駅までは一時間ほど車に乗らねばならないのとこのとで、五時半頃ホテルを出発する。アラビア風の衣装を着たドアマンの横に、これまたアラビアンナイトの子供のような美々しい衣装のボーイが二人、大きめのケーキ箱のような白い箱を捧げて直立している。聞くとその箱は私たちの夕食のお弁当なのだといつすつかり王様気分でタクシーの中から手を振つて出発する。

水たまりの泥水をはね上げながら、牛が寝ころんでいる道を駅にたどりついた頃は、日も落ちていた。

走り寄つた赤帽は、重い私たちのスーツケースを両手に下げ、ガイド持参の小型のケースを頭上に乗せて陸橋を渡る。雨も上がつて、私たちは小走りに彼の後を追つた。

改札口を抜けると、構内の天井一面から「チュウチュウ」というけたたましい鳴き声が聞こえる。聞くとフクロウだと言うのだがどうもその声は鼠に似ていて、コウモリに違いない。頭の上から糞が落ちてきそうな薄暗いホームを待合室に駆け込む。

十二坪ほどの天井の高い待合室は、六人ほど先客がいた。幅の広い板のベッドのようなものが三個ほどばらばらに置かれてあり、列車を待つ老人たちが寝そべっていた。隅に木製のベンチやデッキチェアのようなものが五六個、丸テーブルも一個あつた。ガイドはテーブルの上にお弁当を置くと、

「列車は一時間ほど遅れるそうです」と言つて姿を消してしまつた。一人で夕食を食べにいったらしい。

ふと窓を見ると、十五センチほどのヤモリが外のガラスにへばりついている。私は食事など口にする

状態ではなかつたし、夫もお弁当など広げられる筈もなく、二人とも粗末な椅子に凭れて目を閉じた。ややあつて、横になっていたインドの白い服を着た眼鏡の紳士が近寄つて来た。

「あなたがたは、私たちの国のお客様です。どうぞあちらで横になつて下さい」

と英語で言う。シミの付いた空気枕も夫に差し出された。私は限界に来ていたから、夫の為の申し出だつたらうが、心から感謝の言葉を述べて横になつた。感動するほど嬉しかった。彼の妻は乳飲み子を抱えて、椅子に腰かけていて、ちらりとこちらを見た。

一時間ほどしてやつとガイドが戻つて来た列車は更に遅れて夜中の二時頃になると言う流石に夫もこの状態で五時間以上も待つのは耐えられないと文句をいって、もう一度ホテルに戻ることにした。

再び雨が降りだして、なかなかエンジンからないうタクシーに、物見高い群衆が寄ってくる。ボンネットを開けたり一騒ぎしてやつと車は動き出した。ホテルのベッドで三時間ほど休んでまた雨の中を戻

る。ライトに泥道の中に轢き殺された子牛が照らし出されて、この国ものんびりした風情ばかりではなくなっていることを思い知らされた。

夜中ともなるとコウモリも静かである。汚いホームで待っていると列車が入ってくる。とたんに売り子が出て、お好み焼きのようなものを焼いたり、お茶を売ったりする。

「チャイ、チャイ」

売り声は含みのあるアイ・ジョージばりの美声である。甘いミルクティーを素焼きのコップに入れて売るので。二列車ほどやり過ごして、やつと我等の寝台車がやつてきた。

これまた満員で私だけ何とかが三段の上段に寝ることが出来たが、夫とガイドは通路の細い木のベンチがベッドであつた。後から思えば、先に行った急行列車が私たちの列車で、ガイドが差額をインポケットにしてポロ寝台車に変更したに違ひなかつた。

かくして翌日、朝日も高々と上がった頃、やつと貧民溢れるベナレス駅に到着出来たのであつた。

(平成8年7月)